

ルチアめる

自分を大切にできない病 聖ルチア病院「依存症」治療



依存症サポートチーム

- 国を超えた協働で患者さまを支える～グローバルスタッフとの共生～
- FOCUS／食育の環(わ)
- 聖ルチア病院のプロフェッショナル／精神科デイケア

自分を大切にできない病^{やまい}

■ 聖ルチア病院の「依存症」治療 ■

依存症とは、「他人を頼ることができず、信じられるものは自分しかない」と感じる人々が自身の孤独や苦しみを一瞬でも忘れるために、アルコールや薬物、ギャンブルに頼る病です。

この病を患う人々にとっての目標は、自分自身を客観的に見つめ、
依存しなくても豊かな人生を享受できる力を取り戻すことです。

聖ルチア病院は、依存症の患者さまと回復への道のりを共に歩み、人生を応援していくことを目指しています。

治療の第一歩は病気を知り、 自身を客観的に見られること

依存症は、慢性疾患であり、病気の本質を理解することが治療の第一歩です。肝機能の悪化や経済的な破綻など、依存症の悪影響が顕在化して初めて患者さまは自身の問題を認識します。私たちの目指す治療の目標は、依存しなくても人生の喜びや苦しみをを感じる力を取り戻すことです。これは高血圧や糖尿病などの他の慢性疾患と同様に、定期的な心と体のメンテナンスが必要です。

当院では、入院、外来診療、デイケア、そして自助グループという形で患者さまと関わっています。私たち依存症治療チームは医師、看護師、作業療法士、薬剤師、管理栄養士、精神保健福祉士、公認心理師の多職種から成り、治療過程を専門的に支えています。

治療の重要な要素は 回復の道のりでの人とのつながり

当院の依存症治療では、患者さま自身が主導となり、自己の問題に向き合う環境を整えています。治療の第一歩として患者さま自身が自己の状況を理解することから始まります。この理解が深まるとともに、患者さま自身が自己と向き合い、治療に取り組む意欲を持つことが可能となります。

重要なことの一つに、他の患者さまとの交流があります。治療における自己の位置を理解し、他者と共感し、学び合うことがこのプロセスの一部です。治療プログラム「グラジオラス」に参加する患者さまたちは互いに自身の経験を共有し、そこから学び、成長することができます。これは互いの経験が、自己の問題と向き合い、そ

■ 聖ルチア病院依存症治療 プログラム

薬物依存症治療プログラム

毎月2回、全24回(約1年)のプログラム。

デージー(吐露会)

言いつばなし、聞きつばなしの会。
病棟で毎月1回。患者さま自身でテーマを決め、司会進行、書記をつとめ、実施。

外部の自助グループ

自助グループのオンラインミーティングに参加。毎週1回。

グラジオラスA

アルコール依存症の専門プログラム。
毎週2回、全16回(約2ヵ月)。



依存症者

グラジオラスG

ギャンブル依存などの専門プログラム。
毎週2回、全6回(約3ヵ月)。

ダック

デイケアの依存症専門プログラム。
依存症回復者が司会進行をつとめ、
依存症からの回復過程の体験を語る。
毎週1回。

シロタエギクの会(家族会)

依存症者を家族にもつ方のための
会(本人が治療につながっていても、
いなくても参加可能)。
疾患教育やロールプレイ等で患者理
解やかかわり方を学ぶ。体験や悩み
の共有など。毎月1回。

の解決策を見つけ出す貴重なヒントになるからです。

初めて治療を受ける患者さまは、治療が進んでいる他の患者さまの存在を見て勇気を得ることができます。また、治療の終わりが近い患者さまは、初めて治療を受ける患者さまを通じて、自己の治療初期の経験を思い出し、その過程を再評価する機会を持つことができます。

治療後のサポートと聖ルチア病院の役割

治療プログラム「グラジオラス」はあくまで治療の一部に過ぎません。患者さまが自己の依存症を理解し、自己制御の力を育むためには、入院治療だけでなく、退院後の外来治療や自助グループへの参加も重要です。自助グループは、自身の問題の受容、問題の対処法、人間関係の再構築など、患者さま自身が新たな人生を歩むための

支えとなります。

私たちの役割は、患者さまたちが自己の問題と向き合い、そして解決への道を歩めるように支援することです。多職種で構成するチーム特性を活かして、患者さま一人一人の回復を導くために尽力しています。

依存症は、「自分を大切にできない病」です。それは患者さまが自己を見つめ、人間関係を再構築し、生活を再評価するプロセスを通じて改善することができます。そのプロセスを通じて患者さまを支え、依存症からの回復と、それを維持するための力を育む場所として聖ルチア病院は存在しています。



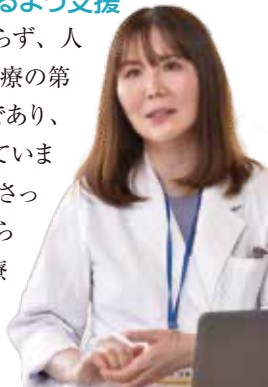
▲依存症の詳細い内容はコチラ

依存症チーム 専門職の役割

病気の理解を深め治療に向き合えるよう支援

依存症は、自身の身体や精神のみならず、人間関係を壊す困難な病気です。その治療の第一歩は、患者さまにとって非常に重要であり、私たち医師の役割も大きな意味を持っています。診察の場に初めて足を運んでくださった患者さまの勇気を称え、さらに信頼関係を築き、理解を深めて治療に向き合えるように支援しています。

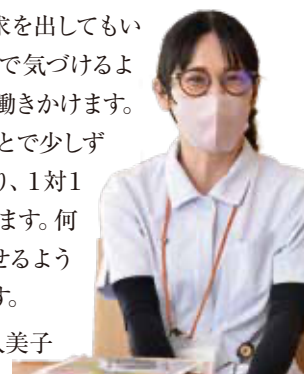
医師 町田 三彩



安心して話せるようになることを重視

依存症の方は、自分の欲求などを無理に抑えつけてでも、周りの期待や要求に応えようとすることが多いです。そのため、自分の感情や欲求を出してもいいということをお患者さま自身で気づけるよう、治療プログラムや病棟で働きかけます。根気強く働きかけ、見守ることで少しずつ心を開いてくれるようになり、1対1の場面で話せるようになります。何より患者さまが安心して話せるようになることを大切にしています。

看護師長 森 久美子

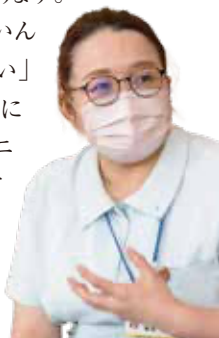


「治したい」という気持ちになるよう支援

アルコールの影響で、栄養や休息が取れていない患者さまがほとんどのため、規則正しい生活を送れるよう支えます。日々の関わりの中で自分語りをすることで、患者さまは気持ちが整理でき、状況を理解できるようになります。

「治さなきゃいけないでしょ」から「治したい」という前向きな気持ちに変わるようなコミュニケーションを心がけています。

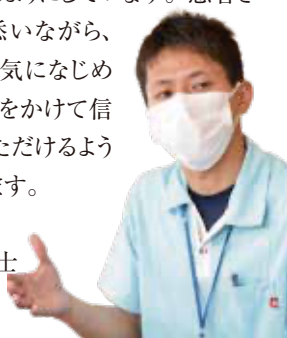
病棟看護師
徳吉 真弓



患者さん同士の輪に入れるように声掛け

作業療法を通じて代謝系をはじめ、心身機能の障害、生活リズムや対人関係の改善など、個々の目標に合わせたサポートをしています。「グラジオラス」では、患者さまの発言を引き出せるようにしています。患者さまに寄り添いながら、会の雰囲気になじめるように声をかけて信頼していただけるよう努めています。

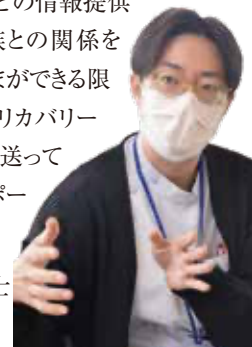
作業療法士
松本 樹



病院や社会とつながるための情報を提供

依存症の患者さまはしばしば「自分でできる、頼りたくない」という思いを抱く傾向があります。私たちは患者さまが無理のない形で病院や社会とのつながりを築けるよう努めています。福祉サービスや自助グループなどの情報提供や調整、ご家族との関係を調整し、患者さまができる限り孤立せずに、リカバリーに向けた生活を送って頂けるようにサポートします。

精神保健福祉士
松本 諒太



国を超えた協働で 患者さまを支える

～グローバルスタッフとの共生～

聖ルチア病院はダイバーシティマネジメントの取り組みの一つとして、2019年よりグローバルスタッフの受け入れを開始しました。現在3人のグローバルスタッフが当院で働いており、外国人

サポートチームで様々な支援をしています。国籍を問わずグローバルに活躍できる人材を活用することで、企業の成長だけでなく、精神医療の立場から地域に住む外国人の健康支援を目指しています。



『一緒に働く仲間』としての意識が強まった

統括管理責任者 中村信哉 (看護師)

ベトナムのヴァンさん、フィリピンのデニスさん、カズオさんは、各病棟で看護師やナースエイドとして、一生懸命働いています。ヴァンさんは当院で4年間働き、患者さんの信頼も得ています。トイレや入浴など、ヴァンさんが声を掛けると「お願い」と患者さんは心よく応じてくれます。患者さんと向き合っ、しっかり話を聞き、応えようとする姿勢が、患者さんに安心感を与えています。聴く姿勢など、私たちが学ばないとい

けないと思います。

病棟職員は当初、戸惑うこともありましたが、丁寧に指導したり、気軽に声を掛けるなどして、一緒に働く仲間という意識が現れています。当院は、イベントや地域交流などを数多く開催しています。コロナが落ち着けば、花火を見たり、おいしいものを食べるなど、病院の行事などにも参加してもらえると良いと思います。



最初はしっかり付き添い 慣れたら見守る姿勢で対応

生活支援 幸若聡史 (ナースエイド)

買い物やゴミ出し、交通機関の使い方など、生活面の支援を担当しています。最初はしっかりと付き添って、慣れてきたら見守る姿勢で対応しています。外国人のサポートは初めてで、すべて手探りでした。ゴミ出しの頻度など、文化の違いがあり、ご近所に迷惑をかけたこともあります。本人たちに悪気はなく、

すぐに理解してくれたのでその後は問題なく生活しています。

3人とも積極的なので、1ヶ月も過ぎないうちに、市内各所に出かけているようです。分からないことがあればスマートフォンの翻訳アプリを使って、コミュニケーションを取るなど、地域の人たちにも受け入れてもらっているようで安心です。これからも本人達が安心して生活できるようにチームで頑張っていきます。



集中できる学習室や勤務中の会話で日本語を指導

日本語教育 安武美津子(看護師)

03

もともと生活支援担当で、幸若さんと協力してサポートしています。ホームシックや孤独に陥らないようにすることが大切で、最初に「具合が悪い時は早く言って下さいね」「遠くに行くときは事前に教えて下さいね」と伝えています。

現在は、デニスさん、カズオさんの日本語の勉強を手伝っています。日本語能力テストを受けてもらい、レベルに合ったテキスト



トを使い勉強してもらいます。病棟の中に学習室を設けて、集中できる環境を整えています。

実践で学ぶ日本語も多いので、病棟看護師の中にそれぞれ教育係を作り、一緒に働いてもらいます。その看護師からチームに情報を上げてもらい、個別に指導することもあります。一緒に料理を作ることもあり、異なる文化にふれるのが楽しいと感じています。

多職種が協力して 国家試験前の学習を支援

04

統括補佐・国家試験対策 中山理恵(副看護師長)

指定年限の4年以内に看護師国家試験に合格することや、試験合格後日本の看護師として働けるようになるためのサポートをしています。日本語を学びながら国家試験合格のためのスケジュールを立てて取り組んでいます。患者さんとコミュニケーションをとらないと日本語能力が上がらないの

で、ふだんは現場の実践と試験向けの学習と半々です。過去問題を解いて、分からなかったことを解説するなどしています。

国家試験の科目ごとに、当院の看護師が分担して講義していますし、薬剤師や管理栄養士、精神保健福祉士も指導を担当します。職員が協力して支えてくれ2年目で合格者を出すことができ、私もとても心強いです。



Work & Future : Insights from Our Team

仕事のこと、将来のこと

介護福祉士の資格を取り、 将来も日本で暮らしたい

ゴータィ・タイン・ヴァン(ベトナム・4年目) [写真右]

ベトナムでは看護師として働き、技能実習生として来日しました。分からないところはすぐに優しく教えてくれるので働きやすいです。介護福祉士の資格を取り、将来も日本に居られたらいいと思います。家族を日本に招待し、良い所だと知ってほしいです。

看護師国家試験に合格。

外国人が精神科医療を受ける手伝いをしたい

アガオ・デニスクリステル・フォンテチャ(フィリピン・3年目) [写真左]

日本の看護師国家試験に合格し、EPA看護師として働けるようになりました。市内にいる外国人の中には、日本語が分からず精神科の医療を受けられない人もいます。私が間に入り、治療を受けられるようにしていきたいです。



精神科看護の勉強をしたくて来日。 皆が優しく安心

ナカジマ・カズオ・カブリアナ(フィリピン・1年目) [写真中央]

フィリピンで看護師をしており、精神科の病気の勉強をしたかったと思いました。父が日本人なので、日本で勉強したいと思い、来日しました。24年2月に国家試験を受ける予定です。合格できれば、ここで働きたいです。日本が好きです。

食育の環(わ)



栄養士
佐藤 明樹

調理師
山下 智子

管理栄養士
池田 順子

今最も注目の情報にフォーカス!

FOCUS

食べることの大切さを知ってもらいたい。
栄養課では、直営の強みを活かし行事食やリクエスト食、患者さまが楽しめる食事指導などに取り組んでいます。スタッフは患者さまと食事を通してコミュニケーションをはかり、食育の環(わ)を広げています。

行事食やイベント食で楽しみを提供

栄養課は、食事に関心を持ち、食べることの大切さを知るきっかけになってほしいと思い、季節に合わせた献立の行事食や、楽しさを演出するイベント食を提供しています。
「子どもの日」では、大人も子どもも楽しめる献立を当日まで試行錯誤し、見た目も楽しいプレートランチができあがりました。新人スタッフは「大変でしたが、患者さんから『かわいい』という感想を聞き、疲れが取れました」「患者さまの笑

顔を見て、大切な仕事だなと再認識しました」と話します。スタッフも病棟にうかがい、患者さまから直接感想を聞くことで、働きがいにつながっています。



リクエストメニューを開始

2022年10月から、患者さまが食べたいものを献立に取り入れるため、リクエストメニューを始めました。毎月1週間程、各病棟にリクエストボックスを置き、食べたいものを書いてもらいます。楽しみにしてくれている患者さまが多く、いつもたくさんのリクエストが入っています。採用された患者さまには栄養課スタッフが持ち回りでカードを手作りし、お礼のコメントや伝えたい思いなどを書いた「サンクスカード」を食事に添えて渡します。

カードを楽しみにしてくれている患者さまも多く、職員の手作りカードも凝ったものになってきました。カードを通して患者さんとの繋がりをもつことで、スタッフのモチベーションも上がっています。



参加型の食事指導

毎月1回、各病棟で健康教室を開催しています。子どもたちの中には、食感や味に敏感であったり、好き嫌いが多い子がいます。食事で食べられるメニューが増えることを期待しています。



そこで食事指導を大切にしています。野菜や肉などの食材カードを、「からだをつくる」「からだの調子を整える」などのグループに分けなが

ら、食品の働きを伝えています。子どもだけでなく、大人も楽しんで取り組んでいただいています。

また食育指導の一つとして、入院患者さまを対象に給食室の見学会を実施しました。自分たちの食事がどんなふうにならされているのかを知り、喫食量の増加につなげることが目的です。大きな鍋やしゃもじなどを見て驚く子どもたちもいて、楽しんでいました。職員の「食べてほしい」という思いも伝わり、喫食量の増加につながりました。

食事は、身体をつくり、心を整える基本です。行事食や食事指導を通して、食事の楽しさや大切さをこれからも伝えていきたいと思えます。

代表 野口 教広 さん

グループホーム(認知症対応型共同生活介護施設)では、認知症の方が介護スタッフの支援を受けながら生活しています。できるだけ住み慣れた環境で生活することを支えます。

みどりのうたは、介護保険制度が始まってから5年後の2005年に開所しました。市内中心部にありながら、久留米市総合スポーツセンターや中央公園などに隣接し、施設名の通り緑豊かな環境に位置しています。敷地内では、バラを中心に様々な花々が四季を彩り、家庭菜園では、入居者とスタッフが共同作業で植えた色々な種類の野菜が育ち、収穫した野菜が食卓に並ぶこともあります。

開所以来18年、地域自治会や子供会との交流を通じ、地域に根差した活動を続けています。看取りにも対応し、最期まで入居者に寄り添う介護を行っています。

私自身は異業種から介護業界に入り、24時間365日頑張っているスタッフのサポートを行いつつ、入居者の救急搬送時には必ず私が救急車に同乗します。

聖ルチア病院さんには、退院患者さんが当施設に入居された後、聖ルチア



施設
情報

グループホーム みどりのうた

〒830-0003

福岡県久留米市東櫛原町1647-6

TEL:0942-36-8400



病院さんへの通院や「重度認知症患者デイケア

すずらん」さんの利用など、充実したサポートをご提供頂いています。精神的に安定せず、当施設で対応が難しい入居者を一時入院で受け入れて頂くなど、入居者の症状等に合わせたきめ細やかな対応をして頂けるので、大変感謝しています。

入居者の高齢化や重度化が進み、医療と介護の密接な連携が益々必要とされています。みどりのうたは、聖ルチア病院さんやすずらんさんとの相互連携、施設間交流などを通じ、今後も「認知症になっても住みやすい地域づくり」に対する社会的責任を果たしていきたいと思っています。

新人紹介

2023年4月、

★ 当院に新しい仲間が加わりました

事務課 / 坂本 綾音、林田 プリンセスサム、池田 美羽

栄養課 / 中垣 亜希、林 美央

作業療法課 / 古賀 愛満

デイケア / 富松 咲都

各部署での活躍を
期待しています。
皆さんよろしくお祈りします!





▲多職種で協力し、患者さまの復職や復学を支える



▲終礼時に1日の取り組みを振り返る

精神科デイケアは、精神障がいのある方が、社会参加、社会復帰、復職や復学などを目標とし、様々な活動を行いながらリハビリテーションを行う通院医療施設です。

精神科デイケアには、作業療法士、看護師、公認心理師、精神保健福祉士、管理栄養士などの専門職が従事しています。スタッフが患者さまと共に目標を設定し、一人ひとりにあった個別の週間プログラムを作成しています。

デイケアの効果としては、①再発防止②生活リズムの改善③体力作り④コミュニケーション力の向上⑤居場所⑥仲間ができる⑦自尊心や社会参加への意欲向上⑧就労スキルの向上、などが挙げられます。プログラムの内容には、就労支援や職場復帰（リワーク）、発達障がいやアルコール・薬物依存症、うつ病などの疾患別プログラム、児童思春期の方の利用に特化したプログラムもあります。

連携先の皆さまへのメッセージ

デイケアでの取り組みや患者さまの様子を関係者と情報交換し、スムーズな社会復帰をサポートしています。お気軽にご相談ください。

社会復帰施設課長・認定作業療法士 越智 哲平



私の
しあわせ
時間

私は映画やアニメ鑑賞が趣味で、休日は家や映画館に行って過ごしています。特にアクションやファンタジーなど非現実的な物語は迫力があり、動物や子供が登場する物語はリラックスできるため時間を忘れて楽しめます。



事務課 石橋 実咲



社会医療法人 聖ルチア会
聖ルチア病院

St. Lucia's Hospital

〒830-0047 福岡県久留米市津福本町1012

TEL0942-33-1581 (代表)

FAX 0942-33-1586

関連施設

- ・精神科デイケア、デイナーケア、ショートケア
- ・重度認知症患者デイケア すずらん
- ・訪問看護ステーション クローバー
- ・訪問看護ステーション クローバー おおき
- ・グループホーム ルピナス

